ソシオメトリック知覚研究の展望

武　田　　建

I　序

私達の生活のうちで相当の時間が，周囲の人々との交りに費やされています。こうした対人関係の中には，「相思相愛」と言った極めて密接なものから「犬猿の間柄」と言った相互の憎しみの感情に至るまで種々様々の型があります。私達は相手と情況に応じて，この中から一番適切と思われる関係を結ぶわけです。私達が毎日とにもかくにも大した支障を来たすことなく生活して行けるのは，私達が或る程度相手側の人間が一体何をしているのか，何を考えているのか，何を感じているのか，そしてこれから何をしようとしているのか，と言った事を相当正確に握んでいる証拠だと言えるでしょう。

社会心理学者の Asch[1]は，「この世の中に生きて行くには，社会的事実つまり人間と集団についての知識を必要とする。換言すれば，人々の間で生活して行くには，お互の存在を知覚し，お互の要求，感情，思考を推測することが極めて大切である」と述べています。ただ私達が他人を知覚し他人の要求を推測する場合，普通極めて自動的に行う様で，私達は知覚や推測に際してほとんどその原理と言ったものは考えません。相手の意図や心理をぴったり当て得る人ですら，こうした知覚や推測の過程を一々分解して考えることはない様です。ところがこの自動的な過程には二つの面があります。私達は一方では知覚により種々な情報をかき集め，他方ではこれから一体どんな事が起るのか予測しているわけです。Tagiuri と Petrullo[40] は知覚過程に影響を与える三つの要素を上げています。即ち第一は相手の置かれている状態 situation であり，第二は行動や感情を示している当人 the person perceived であり，第三は知覚をする人自身 the perceiver つまり知覚者が自分の好き嫌いや欲望偏見の為に相手の人物や事象を色眼鏡で見ると言う現象です。こうした傾向は，私達の対象があいまいであればある程強い様です。最近のソシオメトリック知覚の研究は，この第三の知覚者自身を仮説構成体 hypothetical construct にしている場合が多い様ですが，筆者は更に第四の要素として知覚者と被知覚者との間の感情的な結び附きの度合を，Tagiuri と Petrullo の三つの要素の混合ではありますが，一応これを独立させて加えたいと思います。例えば，恋い焦がれている青年がその恋人を見る場合と，あかの他人を見る場合とではその知覚に大きな違いがあることは明らかです。この様に両者の間の心理的距離が，他者を知覚する際に大きな影響を与えることは容易に考えられます。

二人の人間の間の相互感情は，継続的な過程であって，極めて多種多様な問題を含んでいます。このうちでも両者の間の心理的距離と考えられる「好き・嫌い」の感情は，人間関係の如何なる場面情況にも発見出来る共通の現象と思われます。三十年以上前に Newstetter と Felstein[29] は，社会適応は個人と集団との相互関係により左右されるものであり，個人が集団を，そして集団が個人をどう受け入れるかが重要な鍵であることを主張しています。最近では Homans[24] が人間関係を活動 activity，相互関係 interaction，及び好き嫌いの感情 sentiments of like and dislike に大別しています。又 Tagiuri[33] はグループのメンバー達による相互の評定 rating の結果を因子分析し，影響と主導性 influence and initia-

tive, 与えられた仕事を達成する能力 task competence, 好き嫌いの感情 like-dislike の三つを発見しましたが，このうち最後の「好き・嫌い」の感情だけが全てのグループに見出された要素であると述べています。

この様に「好き・嫌い」の感情とその知覚が最近の社会心理学で取り上げられる様になりましたが，他の社会心理学の分野に比して「好き・嫌い」感情を取り扱うソシオメトリック知覚の研究は未だ極めて未開拓であります。

II　ソシオメトリック地位の知覚

ソシオメトリック知覚に関する研究の先駆けは，今世紀の初頭に Theodore Lipps[27] が感情移入或は共感 empathy の概念を打ち出した時に始まるとも言えますが，それがソシオメトリーによる調査の上で取り上げられる様になったのは，やはり Freud の転移 transference や洞察 insight の理論が普及し，Moreno の役割遂行 role-taking の概念や役割演技 role-playing 及びソシオメトリック・テストが発達してからだと言えるでしょう。これは更に Cottell[14] や Dymond[16 17] の empathy の研究に引きつがれ，更に Toeman[42 43] の二人の被験者間の相互的な empathy の観察測定につながっています。この様な empathy の研究は主としてソシオメトリックな「好き・嫌い」の感情の知覚よりも，グループメンバーの性格や特徴を知覚するものでした。

本格的なソシオメトリック知覚の研究は，イリノイ大学の Ausubel を中心として始められました。Ausubel 達[2 3 4 5 30] は，ソシオメトリック地位の知覚を sociempathy と名づけ，イリノイ大学近くの高等学校のクラスの学生に，お互がどの程度の「好き・嫌い」感情を抱いているか，自分を含めてクラスの者がそれぞれどのくらいのソシオメトリック地位にいるかを五点尺度を用いて推測させました。この調査の結果次の事が明らかにされております[3 30]。

1. 知覚者のソシオメトリック地位の高さと，自分及び他者のソシオメトリック地位の高さを推測する際の正確度との間には有意性のある関係はありません。
2. 自分のソシオメトリック地位の高さを推測する能力は，他者のソシオメトリック地位の高さを推測する能力とは全く関係がありません。
3. 自分のソシオメトリック地位の高さを過少評価する者は，自分は他人に対して非許容的であり，又好ましくない人間だと考え勝ちですが，自分のソシオメトリック地位の高さを過大評価する者よりは現実的なソシオメトリック地位を目標に持っており，実際の事態に容易に適応することが出来ます。
4. 自分のソシオメトリック地位の高さを過大評価する者は，自分を誰からも好かれる好ましい人間と考え勝ちであり，実際に自分が到達し得る以上のソシオメトリック地位を目標に掲げています。こうした被験者達は，自分の成功とか人気を大変気にしている反面，他者の地位の推測は不正確です。
5. ソシオメトリック地位を推測する際の正確度は，相手（つまり被知覚者）の実際の地位の高低に影響されます。即ち被知覚者の地位が高い方が低い場合よりも推測が容易であることが発見されました。

Trent[45 46] は同じ様な調査をプエトリコの犯罪少年の為の収容施設で行い，よく似た結果を得ています。即ち自分のソシオメトリック地位と他者のソシオメトリック地位を推測する正確度には何の関係もなく，両者の地位を推測する能力は，それぞれ異ったものだと述べています。

筆者[41] が 1961 年にミシガン州の少年キャンプで行った調査では，テント仲間の写真を組み分けることにより（イ）実際の「好き・嫌い」の関係，（ロ）自分に対する他の少年達の「好き・嫌い」感情の推測，及び（ハ）自分及び他の少年達のソシオメトリック地位の推測に関する資料を得，それを基にして Ausubel の発見中 1，2，5，及び Trent の発見と同様な結果を得ております。又自分のソシオメトリック地位については，自分の地位を高いと思っている被験者と低いと思っている被験者との間には，その知覚の正確度に有意

性のある差がないことが明らかにされています。

こうした一連のソシオメトリック地位の知覚に関する調査の結果は，「人物や事象の知覚は，知覚者の欲求や態度に影響される」と言う極めて常識的な原則と一致しています。

例えば，より良く適応し，より知的で洞察力があり，自己に対して許容的である者程，自分や他者を現実的に（グループのメンバー達が行った評定の平均に近く）評定していることが報告されています[25]。更に性格或は行動上に極めて顕著な特徴なり特性を持っていると評定された人は，自分と同じ特徴や特性を持った人々を非常に正確に評定することが出来たと言われています[13 15]。Frenkel-Brunswik[21 22] は，各種の自己欺満のメカニズム（例えば，誇大，除去，合理化，反動形成）が自己知覚の正確度を著しく阻害し，我々は仲々自分自身をあるがままには見ないで，むしろ自分達の欲求に基づいて見ているのだと述べています。彼女によれば，自己及び環境の知覚は自分の欲求を満す為に起るもので，この観点から見れば知覚の不正確は自分の心理的均衡を保つ重要な機能とも言える訳です。

Ⅲ　ソシオメトリック知覚と行動型態

先に述べた調査の結果から，知覚者の「主観性」がソシオメトリック知覚に大きな影響を及ぼすことがある程度示されましたが，一体こうした知覚の問題がどの様に私達の日常の行動の有効性 effectiveness に作用するかと言う疑問が，今日のソシオメトリック知覚或は更に広く人間知覚の研究の一つの焦点になって来ています。

Gage[23] は他者の態度を推測する能力，ソシオメトリック地位，及び指導力の間の関係についての報告を調べた結果，各研究に於て発見されたものは必ずしも一致していないことを指摘しています。これは Chowdhry と Newcomb[12] が述べている様に，正確な知覚が必ずしも何時如何なる時や所でも有効に働いているわけではなく，それが特定のグループの構成と機能の上に使われた場合に限り効果を示すものであると考えられます。この点については更に Fiedler[18 19 20] が彼の assumed similarity の研究の中で具体的な例をあげています。

Borgatta[8 9 10] は米国空軍の兵隊 126 名に対して，各人の兵舎内での交友関係，「好き嫌い」の感情，被験者の行った自分と仲間の指導力の評定，上官による被験者の指導力の評定等の間の関係について，大がかりな調査を行いました。この結果「好き・嫌い」のソシオメトリック相互関係に関連のあるものとしては，「多くの仲間を選ぼう（好きになる）とする傾向」と「多くの仲間に選ばれる（好かれる）ことをを期待する傾向」との間に強い関係のあることが明らかにされました。一方ソシオメトリック地位の高低と「多くの仲間を選ぼうとする傾向」との間には何等関係はありませんが，ソシオメトリック地位が高い者程「より多くの仲間から選ばれようとする期待」を持っていることが明らかにされています。Borgatta はこの研究の結果，仲間を選択すると言う行動には（イ）交りの場の正確な知覚と，（ロ）相手を選ぶと同時に相手から選んでもらおうとする期待の相互性があると結論しています。

Campbell と Yarrow[11 46] は，子供達が仲間の間の人間関係と行為をどう知覚するかと言う過程と知覚者が仲間のグループの中でどう行動するかとの関係について調査をする為に，260 名の少年少女達を二週間のキャンプの始めと終りに面接し，且つキャンプ期間を通じて一人一人の子供の行動と交友状態を克明に観察記録しました。この結果子供達が仲間を知覚する際にどんな点に目をつけ，何を手掛りにして，どんな事象を見ているかと言う事と，交友関係に於ける行動乃至機能の効果性（例えば，意見の違いを丸くおさめたり，相手に親切にしたり，指導性を発揮することを効果的とすれば，攻撃的に出たり，引っ込み思案になったりすることを非効果的とする）とは必ずしも関係がないことが明らかになりました。一方仲間を知覚する際の手掛りなり，着目点を基にして相手を理解し考察する場合，知覚者が相当多角的に理解や考察を行い得る子供であればある程，その子供の行動乃至機能の効果性は高いと報告しています。更に交友関係に関する観察やソシオメト

リック面接からは，仲間に受け入れられている子供達の行動は，その受け入れの度合に比例して「自由で且つノビノビ」しているとも述べています。こうしたBorgattaやCampbellとYarrowの調査は，今後の対人関係の知覚の研究に一つの方向を示しているものと考えられ，ソシオメトリック知覚の調査も，単なる知覚の正確度に止まらず，知覚者の行動と知覚過程の質的分析により，より一層の進歩がもたらされると思われます。

Ⅳ　知覚者・被知覚者間の関係とソシオメトリック知覚

ハーバード大学のTagiuriと彼の協同研究者達は，初期の研究[28 32 33 34 35 36]に於ては主として（イ）グループのメンバーがお互に対する気持を「偶然のチャンス」或は「当寸法」よりも正確に推測しているのか，（ロ）グループ内の或る二人のメンバーの間の「好き・好き」或は「嫌い・嫌い」と言った相互の関係は，一体どのくらい存在するのか，その数は「偶然のチャンス」よりも多いのか少いのか，（ハ）a.「好き・好き」及び「嫌い・嫌い」の相互感情の関係mutuality，b.知覚された，つまり知覚者の頭の中で存在すると考えられたに過ぎない相互感情の関係congruency，c.「好き」或は「嫌い」の対人感情を推測する正確度accuracyの三つの現象の間にどの様な関係があるかについて調査を行いました。

Tagiuri達は，人数6名乃至35名，平均年令8才乃至40才の60のグループについて研究を行いましたが，その被験者達は主として米国海軍の兵隊，夏期キャンプに参加している子供達，学校の学級，心理療法の為のグループ等であり，全てのグループはこの一連の調査を行う前から，調査とは関係なく存在していたものばかりを使っています。調査者はまず被験者達に自分のグループのメンバーの中で，「貴方が一番好きな人は誰か」質問した後，更に「貴方を一番好いていると思うメンバーは誰か」尋ねました。そして最後に，被験者が心の中で自分をメンバーの一人一人に置きかえてみて，そのメンバーが「誰を一番好み」「誰に一番好かれていると思っているか」を言わせました。又「一番嫌いな者」についても同様の三段階の質問を行っております。

Tagiuri達はこうして測られた被験者の知覚の正確度が偶然性によって得られうる正確度よりも高いかどうかを調べる為に，各グループの一人一人のメンバー毎に数学的なロボットを作り上げました。このロボットは自分が代りをしている被験者と同じだけの「好き・嫌い」の選択及び推測を行う様に作られました(註)。この結果被験者の知覚の正確度は，ロボットよりもはるかに高かったことが報告されています。

しかしながら，こうした数学的なロボットを使って行う処理方法は，あらゆる条件や要素を無差別に混合し，或る一定時に起る可能性の確率を取り扱う結果になって仕舞います。しかし実際の対人関係は決して一時的なものではなく，相当の期間に渡って継続するものが大部分です。この場合ロボットを使った確率だけでは，長期に渡る複雑な知覚過程を時々刻々の対人関係の変化に伴いとらえることは極めて難しい問題であります。従ってTagiuriと彼の協同研究者達は，やがてその研究の焦点を（イ）ソシオメトリック知覚の正確度accuracy，（ロ）「好き・好き」及び「嫌い・嫌い」の相互感情の対人関係mutuality，（ハ）知覚された相互感情の対人関係congrucncyの三つの現象の間の相互関係にしぼりました。

この研究の結果，被験者が「偶然のチャンス」による確率よりもはるかに正確に自分に対する他のグループメンバーの気持を推測出来る理由の一つは，被験者達が自分に対する「好意」に極めて敏感であり，「好意」を知覚する正確度は「偶然」をはるかに上廻っている結果に外ならない為であると結論されています。これに対して「拒否」或は「嫌悪」の気持を知覚する正確度は，「偶然」よりも上廻っているものの，「好意」の知覚の場合よりもはるかに劣ると報告されています。又一つのグループ内での或る二人の組み合せの一方が，相手が自分に対して抱いていると思う感情と同様の感情を相手に対して持つと言う「知覚された相互感情の関係」congruencyの数は，ロボッ

註　各被験者の選択数は無制限でした。

トの作り出す偶然の数よりも多いことが明らかにされました。これと同様の結果が「実際上の相互感情の関係」mutuality についても得られています。この「相互感情の関係」mutuality は，グループ内での対人感情の知覚にとって極めて重要な働きをするもので，こうした相互的な気持が二人の被験者の間に存在すれば，お互に相手の気持を正確に知ることが出来ると言われていますし，これと逆に相互的な気持が存在しない場合には，相手の気持を言い当てることも難しくなると述べています。

先に触れた筆者の調査に於てもほぼ同様の結果が得られました。被験者の相手の「好意」に対する敏感性は「嫌悪」の情に対するそれよりも極めて高い様で，若し被験者が，相手が自分に対して好意を感じていると知覚した場合は，相手が自分を嫌っていると知覚した場合よりもはるかに正確に相手の実際の気持を言い当てています。一方又「好き・好き」或は「嫌い・嫌い」の相互感情が二者間に存在すれば，相手の自分に対する気持の推測は非常に正しいものとなるのに反して，一方が「好き」でも一方は「嫌い」と言った状態では，相手の気持の推測も不正確になり勝ちであることが発見されています。更に第一の「好意」に対する敏感性と第二の「相互感情」が結びついた場合，即ち二者が相互に好き合い且つ相手が自分に好意を持ってくれていると感じている場合は，必然的にその知覚正確度は最良の状態となり，一方二者間に「相互感情」が存在しない所謂片想いの状態では，仲々相手の気持を正確に知覚出来ないことが明らかになりました。

V　ソシオメトリック選択の明瞭性

最近になって Tagiuri と彼の協同研究者[26 33 37 39]は（イ）グループ内で或るメンバーが他のメンバーに対して持っている感情が，どの様にして外のメンバー達に知られて行くか，（ロ）その場合手掛りになるメンバーの行動行為は何であるか，（ハ）一体どんな要素が，どのくらいの割合でそのメンバーの「好き・嫌い」の態度が他のメンバー達に知られるかを決めるのかについて研究しました。この研究では選択拒否の明瞭性は，或るメンバーの「好き・嫌い」の感情を正確に知覚し得たメンバーの数によって測られました。

この調査に於ても，先に述べた被験者間の「相互感情の関係」mutuality が極めて重要なものであることがわかりました。即ちグループのメンバー達は，一方が「好き」でも一方は「嫌い」と言う「片想いの関係」よりも，「好き・好き」或は「嫌い・嫌い」の「相互感情の関係」の方をはるかに多数のメンバーが知覚していました。更に同じメンバーの選択或は拒否でも，それが「相互感情の関係」mutuality にあるならば，一方が「好き」でも一方が「嫌い」と言った関係にあるよりもはるかに正確に他のメンバー達にわかることが判明しました。又この選択拒否の明瞭性を決定する要因である「二者間の関係」reciprocity を一定にコントロールした場合，一方が相手から「好かれている」と言う期待乃至気持を持っているならば，（恐らく自分の気持を公に表しても相手に拒否されると言う不安がない為にその気持の表明を大胆に行う為か）好かれたと思っている当人の相手に対する選択行為の明瞭性が高くなることが明らかになりました。この二つの結果から予想される様に，グループ内の二者間に「相互感情の関係」mutuality が存在すると同時に，両者がお互に相手から「好かれている」と思っている場合，他のメンバー達にとって同じグループ内での或るメンバーの選択或は拒否行為の明瞭性は極めて高いものとなるわけです。

此処で当然湧いて来る疑問は，「相手のソシオメトリック地位が高い程その地位の知覚は正確になる」と言う Ausubel, Trent 及び筆者がそれぞれ行った調査に共通の発見とグループ内の或る二者間の「相互感情の関係」或は「相手から好かれる期待の相互性」に関する Tagiuri の発見との嚙み合せでありますが，この点については未だ全く手がつけられていない状態にあり，今後の研究の成果が待たれるところです。

VI 考　　察

第四節に於て Tagiuri[26 33 37 39] が被験者は自分に対する「好意」に対して敏感であり，従ってその知覚は正確であること，或は二者間の「相互感情の関係」mutuality が自分に対する他者の気持を知覚する正確度を増すことを発見したことに触れました。又一方が「好き」でも一方が「嫌い」と言う関係が存在する時には，相手の気持の知覚も不正確になり勝ちであることをも述べました。しかしこうした「好き・嫌い」の感情も相手のソシオメトリック地位の知覚の場合には，何等正確度と関係がないことが筆者の調査[41]に於て発見されています。即ち二者間の「相互感情の関係」mutuality も，「知覚された相互感情の関係 congruency も，相手のソシオメトリック地位を推測する場合には役に立たないことが明らかになりました。」従って Ausubel[2 3 4 5], Schiff[30], Trent[44 45]がそれぞれ主張するのと同じ様に，相手のソシオメトリック地位を知覚する能力と自分に対する相手の気持を知覚する能力とは別のものであると言う結果が出てきます。この様に，一般にソシオメトリック知覚と一口に呼ばれる現象は決して一つではなく，各種の異った知覚対象とそれに伴う別個の知覚作用が隣接して存在していると考えられます。従って今後の研究に於ても一応その一つ一つを区別して取り上げる事が必要だと思われます。

現在の段階では，ソシオメトリック知覚の調査方法は極めて粗朴なものですが，グループのメンバー間の感情と地位の知覚を或る角度から量的に測定することは可能な様です。しかし拙稿に於て取り上げた調査のほとんどは，未だにごく初歩的なもので，より一層の進歩の為には，Campbell と Yarrow[11 46] が行った様に現在得られる資料の質的分析を行い，グループのメンバー間の「好き・嫌い」感情とソシオメトリック地位の知覚がどの様にして，何を基準にして，一体何を手掛りにして行なわれたかと言う過程を堀り下げる必要があると思われます。例えば筆者の調査に於ても Tagiuri の調査の結果と同様に大多数の被験者は相手と「相互感情の関係」mutuality の状態にあれば，自分に対する相手の感情を極めて正確に知覚出来たのですが，一部の者にはこうした条件がととのっているにもかかわらず正確な知覚が見られませんでした。この正確度の相違は何処から来るのかと言う疑問が生じます。しかし現在の段階ではその原因は明らかではありません。又ごく一部の被験者は，相手と「相互感情の関係」mutuality にあってもなくても，又相手から「好意」を受けても受けなくても，ほとんどの場合に正確な知覚を行っていたに反し，或る被験者達は絶えず知覚の誤りを犯していました。このことからして，現在取り上げられているグループ内での或る二者間の感情や地位以外の要素（例えば，知能，グループ経験，性格等）が知覚の正確度に何らかの影響を与えるものと思われます。

Tagiuri の調査と筆者の調査の何れに於ても，二者間の「相互感情の関係」mutuality と「好意感情」positive feelings の存在が極めて密接に知覚の正確度と結びついていることがわかりました。ただ Tagiuri は「相互感情の関係」mutuality が相手の感情を正確に知覚する鍵であると結論しています。Ausubel 或は Trent が行った調査に於ても，ソシオメトリック地位の知覚が，被知覚者の地位の高低に影響されると結論しています。しかし此処で「一体何が原因 (independent variables) であり，何が結果 (dependent variables) か」と言う疑問が生れて来ます。この場合 Tagiuri が結論した様に，はたして「相互感情の関係」mutuality が「知覚の正確度」を左右しているのでしようか。たしかに「相互感情の関係」mutuality と「知覚の正確度」との間には密接な関係がありました。しかしこれはあくまでも concomitant variation，つまりXとYが仮説によって予測された方向に向って共に発生したと言うだけです。「相互感情の関係」mutuality は知覚者が相手の気持を知覚するより以前に存在していたと言う証拠が発見されるまでは，これはあくまでも「推論」であって結論にはなり得ないのは当然のことです。

この様な調査計画上の不完全と調査方法の不備

を改善する為には，前述の様にまず個々の被験者との面接により詳しく知覚過程を掘り下げることにより，その解答の一部でも得ることを考慮し，それを基にして更に完全な計画を立てる事が必要と思われます。又色々の文化的背景に於ける異質のグループを用いて，数多くの調査を重ねることが必要です。その為には各調査者の発見を比較検討し，その成果を積み重ねることが出来る様，現在の各人各様の用語を共通の術語に統一す可き時代に来ている様に感じられます。それと同時に急速に進歩しつつある人間知覚乃至認知の研究の成果にソシオメトリック知覚の調査の結果を統合して行くことが今後の課題であると考えられます。

Ⅶ　要　　約

拙稿では，最近米国に於て発表された人間知覚の研究のうちで，特に（イ）ソシオメトリックの選択拒否の対人関係及びソシオメトリック地位がそれ等の知覚の正確度とどんな関係にあるか，（ロ）そうした知覚の正確度が知覚者や被知覚者の言動やその効果性とどう関係しているか，（ハ）ソシオメトリック知覚の過程の中で何が知覚の正確度の増減と関係しているか等に関する調査の方法と発見を展望してみました。

多くの研究に於て知覚者のソシオメトリック地位の高低と知覚者自身及び他者のソシオメトリック地位の知覚の正確度との間には，有意性のある関係は存在しないことが報告されています。又自分のソシオメトリック地位を推測する能力と，他者のソシオメトリック地位を推測する能力とは関係がない様です。ただ被知覚者の地位が高い方が低い場合よりも正確に推測し易いと言う結果が出ています。Frenkel-Brunswik はこうした知覚の不正確性の原因を，我々が自分自身をあるがままに見ないで自分達の欲求に基づいて見ると言う「自己欺満のメカニズム」の為だと説明しています。或は Chowdhry と Newcomb が指摘した様に，正確なソシオメトリック知能は何時何如何なる時にも行なわれるのではなく，特定のグループの構成と機能にうまくぶつかった時にのみ発揮出来るものなのかも知れません。Borgatta によれば，「多くの仲間に選ばれようとする傾向」と「多くの仲間を選ぼうとする傾向」との間には強い関係があります。又ソシオメトリック地位が高い者程「多くの仲間から選ばれようと期待する傾向」が強いのに反し，ソシオメトリック地位の高低と「多くの仲間を選ぼうとする傾向」との間には何等の関係もありません。Campbell と Yarrow により特定の知覚の過程や型態と言動の良否や効果性との間には関係がないことが述べられています。但し知覚者が被知覚者及び事象を多角的に理解考察し得る人間であればある程，行動の効果性は大きいと報告されています。

対人感情の知覚では，好意的な態度・感情及び知覚者と被知覚者の間の「相互感情の関係」が知覚の正確度と密接な関係があることが明らかにされています。しかし「相互感情の関係」が存在しない場合，例えば「片想い的な関係」と知覚の正確度との結びつきはない様です。又「相互感情の関係」が存在している二者間の対人感情は比較的正確に他のグループ・メンバーにも知覚出来る反面，こうした「相互感情の関係」が存在しない二人の間の対人感情は正確に知覚され難いことが報告されています。こうした対人感情が明瞭になる一つの原因は，「相手に好意を持たれている」と言う意識であるとのことです。この様に二者間の関係，特に「相互感情の関係」は対人感情の明瞭化の上で極めて重要ですが，ソシオメトリック地位の明瞭性とは何の関係もないことは興味深いことです。

この様にソシオメトリック知覚の中にも，対人感情或は地位と言った各種の対象があり，その各々の知覚にはそれぞれ独特の知覚能力が必要とされ，その各々の知覚能力は必ずしも一致するものではない場合もあると考えられます。

現在のソシオメトリック知覚の研究の多くは，単に関連性がある二つの現象を不完全な根拠に基づいて因果関係と断定している様に見受けられますが，こうした関係をはっきりさす為には，被知覚者を面接することによって詳しく知覚過程を掘りさげる必要があると思われます。又発見された結果の一般化の為には各種の背景を持つ異質グル

ープを使って数多くの調査を重ねることが今後の課題かと思われます。

References

1. Asch. S. E. *Social Psychology*, Englewood Cliffs, N. J.: Prentice-Hall, 1952.
2. Ausubel, D. P. "Reciprocity of Acceptance among Adolescents: A Sociometric Study," *Sociometry*, 1953, 16, 339–349.
3. Ausubel, D.P. "Sociempathy as a Function of Sociometric Status in an Adolescent Group," *Human Relations*, 1955, 8, 175–184.
4. Ausubel, D.P., Schiff, H.M., and Tasser, E.B. "A Preliminary Study of Developmental Trends in Sociempathy: Accuracy of Perception of Own and Others' Sociometric Status," *Child Development*, 1952, 23, 111–128.
5. Ausubel, D. P., and Schiff, H. M. "Some Intrapersonal and Interpersonal Determinants of Individual Differences in Sociempathic Ability among Adolescents," *Journal of Social Psycholgy*, 1955, 41, 39-56.
6. Ausubel, D. P., and Schpoont, S.H. "Prediction of Group Opinion as a Function of Extremeness of Predictor Attitudes," *Journal of Social Psychology*, 1957, 46, 19–29.
7. Borgatta, E. "Analysis of Social Interaction and Sociometric Perception," *Sociometry*, 1954, 17, 17–32.
8. Borgatta, E. "The Stability of Interpersonal Judgments in Independent Situations," *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 1960, 60, 188–194.
9. Borgatta, E. "Rankings and Self-Assessments: Some Behavioral Characteristics Replication Studies," *Journal of Social Psychology*, 1960, 52, 279–307.
10. Borgatta, E. "Analysis of Social Interaction and Sociometric Perception," in J.L. Moreno et. al. (eds.) *The Sociometry Reader*, Glencoe, Ill.." The Free Press, 1960. 272–297.
11. Campbell, J.D., and yarrow, M. "Perceptual and Behavioral Correlates of Social Effectiveness," *Sociometry*, 1961, 24, 1–20.
12. Chowdhry, K., and Newcomb, T.M. "The Relative Abilities of Leaders and Non-leaders to Estimate Opinions of their Own Groups," *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 1952, 47, 51–57.
13. Cogan, L., Conklin, A., and Hollingworth, H. L. "An Experimental Study of Self-Analysis," *School and Society*, 1915, 2, 171–179.
14. Cottrell, L.S. Jr. "The Analysis of Situational Field in Social Psychology," *American Sociological Review*, 1942, 7, 370–382.
15. Dudycha, G. J. "Self-Estimates and Dependaility," *Journal of Social Psychology*, 1940, 12, 39–53.
16. Dymond, R. F. "A Scale for the Measurement of Empathic Ability," *Journal of Consulting Psychology*, 1949, 13, 127–133.
17. Dymond, R. F. "Personality and Empathy," *Journal of Consulting Psychology*, 1950, 14, 343–350.
18. Fiedler, F.E. *Leader Attitudes and Group Effectiveness*, Urbana, Ill.: University of Illinois Press, 1958.
19. Fiedler, F. E., Hartmen, W., and Radin, S. *The Relationships of Interpersonal Perception to Effectiveneness in Basketball Team*, Bureau of Research and Service, University of Illinois, Mimeographed, 1952.
20. Fiedler, F. E., and Senior, K. "An Exploratory Study of Unconscious Feeling Reaction in Fifteen Patient-Therapist Pairs," *Journal of Abnornal and Social Psychology*, 1952, 47, 446–455.
21. Frenkel-Brunswik, E. "Mechanisms of Self-Perception," *Journal of Social Psychology*, 1939, 10, 409–420.
22. Frenkel-Brunswik, E. "Personality Theory and Perception," in R.R. Blake and G. V. Ramsey (eds.) *Perception: An Approach to Personality*, New York: Ronald Press, 1951, 3, 56–419.
23. Gage, N.L. and Suci, G. "Social Perception and Teacher-Pupil Relationships," *Journal of Educational Psychology*, 1951, 42, 144–153.
24. Homans, G. C. *The Human Group*, New York: Harcourt, Brace & Co., 1950.
25. Jackson, T.A. "Errors of Self Judgment," *Journal of Applied Psychology*, 1929, 13, 372–377.
26. Kogan, N., and Tagiuri, R. "On Visibility of Choice and Awareness of Being Chosen," *Psychological Reports*, 1958, 4, 83–86.
27. Lipps, T. cited by E. Borgatta in J. L. Moreno et. al. (eds.) *The Sociometry Reader*, Glencoe, Ill.: The Free Press, 1960.
28. Luce, R. D., Macy, J. Jr., and Tagiuri, R. "A Statistical Model for Relational Analysis," *Psychometrika*, 1955, 20, 319–327.

29. Newstetter, W. I., and Felstein, M. J. *Wokokiye Camp: A Research Project in Group Work*, Cleveland: School of Applied Social Sciences, Western Reserve University, 1930.
30. Schiff, H. M. "Judgmental Response Sets in the Perception of Sociometric Status," *Sociometry*, 1954, 17, 207–227.
31. Speroff, B. J. "A Measure of Mass Empathy," in *The Status of Empathy as a Hypothetical Construct in Psychology Today*, a Symposium of the American Psychological Association, Mimeograph, Psychology Department of Louisiana State University, 1953.
32. Tagiuri, R. "Relational Analysis: An Extension of Sociometric Method with Emphasis upon Social Perception," *Sociometry*, 1952, 15, 91–104.
33. Tagiuri, R. "Social Preference and its Perception," in Tagiuri, R., and Petrullo, L. (eds.) *Person Perception and Interpersonal Behavior*, Stanford, Calf.: Stanford University Press, 1958.
34. Tagiuri, R., Blake, R. R., and Brunner, J. S. "Some Determinants of the Preception of Positive and Negative Feelings in Others," *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 1953, 48, 585–592.
35. Tagiuri R., Brunner, J. S., and Blake, R. R. "On Relation among Members of Small Groups," in E. E. Maccaby, T. E. Newcomb, and E. L. Hartley (eds.) *Readings of Social Psychology*, New York: Henry Holt and Co., 1958, 110–116.
36. Tagiuri, R., Brunner J. S., and Kogan, N. "Estimating the Chance Expctancies of Dyadic Relationships within a Group," *Psychological Bulletin*. 1955, 52, 122–131.
37. Tagiuri, R., and Kogan, N. "The Visibility of Interpersonal Preferences," *Human Relations*, 1957, 10, 385–390.
38. Tagiuri R., and Kogan, N. "Personal Preference and the Attribution of Influence in Small Groups," *Journal of Personality*, 1960, 28, 257–265.
39. Tagiuri, R., Kogan, N., and Brunner, J.S. "The Transparency of Interpersonal Choice," *Sociometry*, 1955, 18, 368–379.
40. Tagiuri, R., and Petrullo, L. *Person Perception and Interpersonal Behavior*, Stanford, Calf.: Stanford University Press, 1958.
41. Takeda, K. "Accuracy of Sociometric Perception and its Relation to the Actual and Perceived Dyadic Relationships and Siocometric Popularity among Boys' Groups in a Camp," unpublished doctoral dissertation, Michigan State University, 1962.
42. Toeman, Z. "Clinical Psychodrama: Auxiliary Ego Double and Mirror Techniques," *Sociometry*, 1946, 9, 178–183.
43. Toeman, Z. "The Double Situation in Psychodrama, "*Sociatry*, 1951, 1, 436–446.
44. Trent, R. "The Relationships of Anxiety to Popularity and Rejection among Institutionalized Delinquent Boys," *Child Development*, 1959, 28, 379–384.
45. Trent, R. "Anxiety and Accuracy of Perception of Sociometric Status among Institutionalized Delinquent Boys," *Journal of Genetic Psychology*, 1959, 94, 85–91.
46. Yarrow, M., and Campbell, J. D. "Person Perception in Children," *Merrill–Palmer Quarterly*, 1963, 9, 57–72.